八十六　嘆けとて　月やは物を　思はする　かこち顔なる　我が涙かな

西行法師



月

〈声に出してよんでみよう〉

ナゲケトテ　ツキヤワモノオ　オモワスル

カコチガオナル　ワガナミダカナ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1] 助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。

＊ワ行オ段の「を／ヲ」は、古語では [wo] と発音されていました。十一世紀初め頃、ア行オ段の「お／オ」が [o] から [wo] に変化したため両者の発音の区別が失われ、さらに十七～十八世紀頃、両者ともに [o] と発音されるようになり、現在に至っています。

〈どんな意味だろう〉

「嘆け」と言って、月が物思いをさせるのだろうか。

（いや、そんなことはない。嘆いているのは、私の心の問題なのだ。）

（それなのに、月が「嘆け」と言ったからだ、と言わんばかりの、）言い訳がましく恨みがましい、私の涙だなあ・・・！

＊「嘆け」は、動詞「嘆く」の命令形です。「**とて**」は、と言って、という意味です。ここでは、月を人間のようにたとえています。このような技法を、**擬人法**と言います。

＊「**やは**」は、**反語**を表します。反語とは、「…だろうか、いや、そんなことはない」というように、疑問の形で問いかけておいて、強く打ち消す、否定の強調表現です。

＊第三句「思はする」の最後の「する」は、使役を表す助動詞で、ここが文末になります。このような歌の構造を「**三句切れ**」と言います。

＊「**かこつ**」は、他のせいにする、言い訳にする、かこつける、という意味です。また、「…顔なる」は、…の様子である、という意味です。

＊文末の「**かな**」は、「…だなあ！」という詠嘆・感動を表します。現代語の「かな」と違って疑問の意味はありませんので、注意しましょう。

〈解説〉

作者は、何を嘆いているのでしょう？　生きていくうえでの一般的な嘆きであるとも読めますが、**詞書**（歌の前書き）によれば、恋の嘆きであると言います。作者の西行は出家の身、恋歌はふさわしくありません。出家前の恋を思い出して詠んだ歌であるとも、**題詠**（出題されたテーマに合わせて歌を詠むこと）であって実体験とは限らないとも、また、特定の女性への恋愛感情ではなく世の中すべての人を恋しく思う心であるとも、さまざまな説が唱えられています。しかし、決め手はありません。

詠まれた時の実際の事情はわかりません。しかし、それよりも重要なのは、この歌が、人々の心に広くあてはまる普遍性を持っている、ということです。そのため、さまざまな解釈が可能になるのです。そのような普遍性こそ、すぐれた歌の条件であり、この歌が現代までずっと愛され続けている理由である、と言えるでしょう。

さて、あなたは、どのように解釈しますか？

〈作者と出典〉

西行（一一一八～一一九〇）は、平安時代末期の歌人です。もとは、佐藤義清という名の武士でしたが、一一四〇年、二十三歳で出家しました。出家の理由は不明です。争乱の時代にあって世の無常を感じたからだとも、高貴な女性との恋に破れたためだとも言われていますが、いずれも、伝説の域を出ていません。

出家後は各地を旅してまわり、江戸時代の俳人である松尾芭蕉（一六四四～一六九四）などにも大きな影響を与えました。

次の歌は、神奈川県大磯町の鴫立沢という地名の由来にもなった有名なもので、「三夕の歌」[2]の一つです。

心無き　身にもあはれは　知られけり　鴫立つ沢の　秋の夕暮れ

（物事の情趣を感じることのないはずの、出家した私の身にも、しみじみとした情趣は自然に感じられるものなのだなあ！　鴫が飛び立つ沢の、秋の夕暮れは・・・！）

西行は、四季折々の情趣・風流をこの上なく愛し、多くのすぐれた歌を詠んでいます。特に、桜の花と月を愛で、次のような歌も詠んでいます。

願はくは　花の下にて　春死なむ　その如月の　望月の頃

（願いは、桜の花の下で、春、死にたい、ということだ。その二月の満月の頃に。）

この時代、単に「花」と言えば桜の花を指しました。当時の暦は、月の運行に基づく陰暦で、望月（満月）は毎月十五日、春は一・二・三月でした。「如月」は、二月の異名です。二月十五日は、釈迦の入滅の日です。西行という法名も、西方にある極楽浄土へ行くことを意味しています。

西行は、この願いどおり、一一九〇年二月十六日、七十三歳で亡くなりました。

「八十六　嘆けとて」の歌の出典は、七番目の**勅撰和歌集**（天皇の命令で編集された和歌集）である『**千載和歌集**』（一一八七年成立）です。また、西行の**私家集**（個人の歌を集めた和歌集）である『**山家集**』（一一九〇年頃成立）にも収録されています。


桜


月


寺

---

[1] ハ行の子音は、八世紀頃 [p] から [ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて十一世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の [ɸ] が [w] と発音されるようになりました。なお、[ɸ] が [h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、十七世紀頃と推定されています。

[2] 「三夕の歌」とは、「秋の夕暮れ」と結ばれる三首の名歌です。いずれも、八番目の勅撰和歌集である『**新古今和歌集**』（一二〇五年頃成立）に収録されています。他の二首は、次のとおりです。

見渡せば　花も紅葉も　なかりけり　浦の苫屋の　秋の夕暮れ　　**藤原定家**

（あたりを見渡すと、花も紅葉も、何もないのだなあ！　海辺の、苫で屋根を葺いた粗末な小屋の、秋の夕暮れは・・・！）

寂しさは　その色としも　なかりけり　槙立つ山の　秋の夕暮れ　　**寂蓮法師**

（寂しさは、特にどの景色のせい、というわけではなかったのだなあ！　常緑の槙の木が立つ山の秋の夕暮れは・・・！　紅葉などの秋らしい景色ではないのに、この上なく寂しさを感じさせるものなのだなあ）

なお、三夕の歌はいずれも、第三句が「けり」という詠嘆の助動詞で終わり、ここが文末になっています。このような和歌の構造を「**三句切れ**」と言います。また、どの歌も「夕暮れ」という名詞で終わっています。このような技法を、「**体言止め**」と言います。名詞

は、体言とも言うからです。通常の文は、体言ではなく、動詞や形容詞といった用言、助動詞、助詞などで終わります。このため、「体言止め」はあとにまだ何かが続くような感じを与え、**余情・余韻**を生み出す効果があります。「三句切れ」や「体言止め」は、『新古今和歌集』の時代に多用されました。